

平成27年度
喜多方市小学校農業科作文コンクール

作品集



喜多方市教育委員会

喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

発刊に寄せて

喜多方市教育委員会教育長 芳賀 忠夫

今年も市内全小学校十七校、一千六百十二名で小学校農業科を実施することができました。小学校農業科の運営にあたり、農業科支援員の皆様やJAをはじめとした関係機関の皆様、耶麻農業高等学校の皆様や各小学校の先生方など、多くの皆様のご支援とご協力に対して心から御礼と感謝を申し上げます。

さて、小学校農業科は市内の全小学校で実施してから今年度で五年目を迎えました。各小学校では様々なアイディアを取り入れ、学校独自の実践がなされるようになりました。例えば、上級生が下級生に田植えの方法を説明することにより、子どもたちが主体的に取り組めるようにしたり、班を縦割りに編成し畑の収穫をすることにより、社会性を意識しながら作業させたり、農業科支援員さんをはじめ農業科に関わった方を収穫祭に招待することにより、感謝の気持ちを表す会にするなど、小学校農業科のねらいとして掲げられている「豊かな心の育成」「主体性の育成」「社会性の育成」が各校で実践することができました。

そのような中、今年は一千五百四十四名からの作品応募がありました。現在、「いじめ」「SNSによるトラブル」は社会的な問題となっておりますが、子どもたちの作品を読む限り、全くそのようなことは感じられません。

それは、小学校農業科で「種から行うこと」、「できるだけ手をかけること」、「ゴールを見据えて作付けすること」が効果的に働き、じっくり命を育てることで、思いやりの心・皆で協力・忍耐力を養うなどの心が育っているとされます。作文は「農業・自然・環境」、「いのち」、「喜び・感謝」、「くらし・関わり・生き方」の四つの観点から書かれており、これらは決して体験しなければ表現できない思いがたくさん詰まっています。また、将来立派な農家になるために、ほこりをもってしっかり努力したいこと、二年間の米作りで、ぼくの「いただきます」に対する思いが変わったこと、農業がわたしたちにいろんな力をくれたこと、最初はあまり好きでなかった農業が、おもしろいと感じるようになったこと、遊んだりおしゃべりしたりすること以外にも食べ物を育てることは楽しいと思えるようになった様子など、子どもたちの言葉で感じたことが、素直な言葉で表現されており、今回、一千五百余りの作品から四十五作品の紹介となりますが、他の作品も甲乙つけがたい作品ばかりで多くの方々に紹介できないのが残念でなりません。

最後に、大変お忙しい中ご寄稿いただきました関東学院大学の佐藤幸也先生、審査をしてくださった審査員の皆様に心より感謝申し上げます。今後は、喜多方市の小学校農業科が現状で満足することなく、外部の研究機関と連携を図りながら、さらに進化した小学校農業科の実践ができるよう取り組んで参りたいと思います。

「今日の教育課題と新学習指導要領」

喜多方市小学校農業科の進取性

関東学院大学理工学部 教授 博士 佐藤 幸也



1 新学習指導要領の編成と実践と道徳と体験をめぐって

新学習指導要領（以下、学指）が平成二十八年三月から検討されます。

そこでは二十一世紀になってからしばしば取り上げられた子どもの発達
のゆがみと人格形成という課題を引き継ぎながら道徳の教科化が図られ
ることになりました。教育基本法の理念は平和で民主的な社会における
豊かな人間形成です。有り余るモノに囲まれお金さえ払えば何でも手に
入り、汗一つかなくても自分の欲望が満たせる社会で、子どもたちが
「生きている充実感」を感じ取ることは困難です。他者と接しなくても
嫌なことを避けても生きていける社会となりました。これでは人間とし
ての能動性が発達しません。

また高速交通体系の整備や冷戦の終了などを受け急激な地球の一体化
が進みました。IT革命はさらなる段階に達し、金融はコンマ一秒で利
ザヤを稼ぎ、資本は地球上のあらゆる地域で奔放に活動するようになり
ました。このギャンブル資本主義や禿鷹資本主義と呼ばれる経済活動に
国家が従属するような世界となっています。つまり、額に汗して働き、
誠実に人々と向き合うのではなく、巧妙に欺いて利益を独占することが
「勝ち組」と言われる世界になったのです。この大波は、日本の伝統的
良さを根こそぎ破壊つくし「地方消滅」に追い込もうとしています。こ
れではまじめに働く意欲が失われます。勤勉は社会の隅に追いやられま

す。報徳教育の伝統を持つ会津や相馬地域の生き方からすれば極道の所
業でしょう。「意欲格差社会」（山田昌弘）が継続的に生み出されパラサ
イト的生き方が増え、地域（都市部も）がスラム化します。それが現実
的格差社会拡大を助長します。

言い換えると、物欲と金に支配され、そのための情報があふれ弱い立
場に立つ人々を奈落に追い落とす社会において、子どもたちや保護者さ
えも自分がみんなの役に立っている、何のために生きているのか、とい
う実存的危機を抱え未来に対する不安をぬぐえない、ということ です。
ですから、家庭や学校で先生方が望ましい生き方を示しても、それを受
け入れる、感じ取る主体が育ちにくいのです。「生き方ありかた」を学指
の編成原理にしてきたのはそのためでした。ただし、教育だけで解決で
きる問題ではないことは明らかです。

しかし、座視しているわけにいきません。教育界からは子どもたちの
能動性が発揮され主体的に生きる基礎を培うための自然体験を含む豊か
な体験や総合的な学習の時間などが提唱されました。前回の学指ではそ
れに加え体験に裏付けられた言語活動の充実や、ふるさとを愛し自然、
伝統、文化などを学び、いのちを大切にする教育の重要性が語られまし
た。ですが、全国的にこの理念に沿った学校教育が行き詰っていること
は周知のとおりです。なぜなら、実態は学力競争中心主義だからです。
この競争は他者を蹴落とし、少しでも自分の地位をあげることで豊かさ
の資格を手に入れるというものです。塾も予備校も巨大産業で、青年た
ちは大都市に吸収されていきます。残念ながら「本音」と「建て前」が
分裂する日本の学校教育の本質がここにあるのです。

喜多方市は違います。同じ競争でも、会津の伝統文化を吸収し、仲間
と助け合い、支援員さんや農家の人々の愛情に育まれ、それに応えよう
とする競い合いで、争いではありません。自分を含め人々や生きとし生

けるものを大切にしようとする「**知性**」の学びがなされてきました。子どもたちの作文にはそれらがあふれています。つまり、二十一世紀の教育課題と言われるものに正面から向き合い、確かな実績を残してきたのが農業科なのです。日本中の人々が喜多方方に注目し視察に訪れるのはそのためです。声高に道徳を強調しなくても喜多方は人倫の教育を実践しているのです。学びの対象は喜多方そのものであり、子どもたちや先生方はいのちと向き合い、そこから真摯に学び、豊かな人間としての自立への道確かなものになっているのです。

2 特別の教科道徳の目標、内容、指導計画と喜多方市農業科にアクティブ・ラーニング

従来の価値注入的道徳は質的転換を迫られています。各学年を通じて、自立心や自律性、生命を尊重する心や他者を思いやる心を育て、「働くことや社会に奉仕する充実感を味わい、その意義を理解し、公共のために役立つ」ことを念頭に置きながら、「自然体験活動、地域の行事への参加などの豊かな体験を充実」し、それらが「児童の日常生活に生かされる」ことが求められています。実践にあたっては、地域や学校の裁量が認められています。その他、学指解説の道徳関連の内容を検討すると、これまで農業科がやってきたことが多く書かれています。中央教育審議会等での識者の議論は、喜多方市教育長、教育員会をはじめ各学校で議論や実践と大きな違いはありません。また、新学指の目玉とされている、自分で課題を見つけ主体的、体験的活動を通じた学びによって課題解決を図るアクティブ・ラーニングは、まさにこの十年間農業科で行ってきたことなのです。文科省や社会がようやく喜多方市に迫りついてきた、と言えるでしょう。教育改革の方向からすれば、当然学力及び学力の評価の観点や内容も変わらざるを得ないでしょう。いわゆるセンター試験が

廃止され新テストに移行する、というのもこうした流れにあります。混乱を深める社会は教育に解決を求め、変わらざるを得ないものなのです。

ところで『会津農書』に書かれたように、農業は単に食料を生産しているだけではありません。地域の自然を再生産し文化を育み、鉱工業や水産業、川や道を通じて発展する商業などとの相互交流を通じて、長い歴史を経て大きな国家社会・共同体を築いているのです。「農」はかけがえのない社会的共通資本なのです。

『小学校農業科副読本』にも書いておきましたが、これらを総合的に生かす学習が農業科です。市民、保護者のみなさんが支えてきた農業科はそれほど本質的で時代的要請を踏まえたものなのです。これはまさに「喜多方市が有する教育的価値」です。私は人間形成の土台と呼んできます。生活綴り方運動では「生活台」とも言われていました。単なる人間ではありません。思いやりと愛情、知性にあふれたふくよかな人間です。そこには会津の伝統や文化が反映されています。喜多方の魅力と言え換えることもできます。

3 時代を拓いた喜多方市農業科へ広がるシティファームや人間らしい暮らしへの転換

小学校農業科の視察研修に訪れていた新潟市は、喜多方市の取り組みを参考にしながら新規就農、教育宿泊を含めた体験学習、グリーンツーリズムなどの一大拠点を開設しました。同様の取り組みは少しずつ広がっています。EU諸国では普通に行われているシティファームですが、行政によるのは事実上日本初となります。私が勉強しに行ったバンクーバーのブリティッシュ・コロンビア大学にもUBCファームがあり、市民や小中高生が農業の勉強をしていました。ここではESDも行われていました。「農」には多面的価値と多様な機能があるからです。特に、

地球温暖化といった環境問題、生物多様性の保持、地域の持続的発展、医療福祉効果などは最たるものです。ですから、欧米諸国では農を学び農に抱かれる暮らしを大切に、農村滞在も定着しています。

また、喜多方で研修していた北海道教育大学がJAなどと連携して食農教育による教員養成を行い、千葉大学、茨城大学、清泉女子大学、早稲田大学、立教大学などでも農に学ぶ教育が進められています。

さらに注目されるのが大都市圏からの地方移住です。熟年リタイヤ層だけではありません。子育て世代や独身の青年たちが生きがいを求めて長野、鳥取、北海道、島根の杳岐などにまで移住し新生活を始めているのです。「増田リスト」で示された地方消滅と真逆の動きが展開しているのです。今や「子育てするなら地方で」が合言葉になるほどです。しかし、その受け皿になる地方で地域を生かした教育が十分されているわけではなく、おそらくこの教育委員会も先生も地域を生かした学力形成と人間形成の断絶に悩んでいるでしょう。

こうした国民的動きを先導し影響を与えたのは喜多方市農業科ではないでしょうか。それほど農業科が社会に与えたインパクトは強烈だったのです。「いのちを学び、いのちと共に学ぶ、いのちに恩返しをする」という当たり前のことが出来ない社会だからです。中村桂子先生が農業科にエールを送り続ける理由です。

しかし、できないということが如何にゆがんだもので、日本人の本性に反するものであるかと突きつけたのが「東日本大震災」です。世界中の人々が日本人の我慢強さ、規律の高さとホスピタリティに感動しました。復興は道半ばですが、私たちにはいのちや小さきものを大切に、悲しみや苦しみを共にするという「共感」があることを思い起こさせました。支援活動にあたる人々には、この共感概念の豊かさを見ることが出来ます。

実はこの「共感」、ルソーの思想の中核をなすものです。二十世紀に隆盛する児童中心主義の教育を支える思想は共感を核にします。ルソーの共感論はデヴィッド・ヒュームやカントに強い影響を与えました。また、古典派経済学の始祖アダムスミスの経済学や最近のノーベル経済学受賞者の経済学、そして経世済民という経済の根本を支える思想の核でもあります。生命への共感がない経済活動は殺戮さつりくと絶滅を結果します。

強欲で権力を振りかざそうとする動きが目立つ日本社会ですが、これは壞国に向かう動きです。地域や農を滅ぼして継続的に栄えた国はありません。そのようなことが平気で行われるようになった理由の一つが、真摯にいのちや農業、農村を学ばなくなったこと、そうした体験を継承する場が絶滅しそうになっている事です。「米が足りなくなったら輸入すればいい」という人々のおつむには、「平成米不況」で日本が緊急輸入したために米の国際価格が十倍にも達し、東南アジア諸国の人々が米を食べられず飢えたことに対する経済的、倫理的責任は浮かばないでしょう。喜多方の子供たちなら、どうにかして飢餓に苦しむ子どもたちを救いたいと願い手を差し伸べるでしょう。それが、国際的信頼にもつながります。外交は金や軍事力で行うものでなく、人と人の信賴がカギになるはずで、他国の農業や文化を尊重し人々の幸せを願い、モノづくりで世界に貢献する思想と行動が世界で尊敬される道ではないでしょうか。日本国憲法の前文にはそのことが描かれており、戦争という不幸を克服する決意でありました。喜多方市小学校農業科はそのような子どもたちを育てている、ということも理解していただきたいと思います。教科化される道徳や新たな目玉アクティブ・ラーニングは、農業科がリードすることになるでしょう。

喜多方には本物の「いのちの学び」があります。

入 賞 作 品

目次

【大賞】

農業の力

豊川小学校 五年 佐原 凜香 12

農業っておもしろい

慶徳小学校 六年 五十嵐 聖加 15

わたしにとって農業とは

第三小学校 六年 大塚 千晴 13

農業の願い

堂島小学校 六年 関本 悠太郎 16

ぼくの「いただきます」

豊川小学校 六年 遠藤 星矢 14

【優秀賞】

おいしくなあれ、おいしくなあれ

第三小学校 四年 山 凜太郎 17

ありがとうジャガイモ

塩川小学校 四年 五十嵐 和奏 18

おじいちゃんの作るお米

第一小学校 五年 齋藤 春都 18

一つぶ一つぶの大切さ

第二小学校 五年 大野 双葉 19

いね一本の大切さ

慶徳小学校 五年 石田 あめり 20

農家の心

関柴小学校 六年 加藤 泰熙 21

農業への思い

熊倉小学校 六年 工藤 葵 22

農業科から教えてもらったこと

熊倉小学校 六年 井上 温斗 23

私に今、できること

豊川小学校 六年 東條 菜々子 24

農業科で学んだ思い

加納小学校 六年 森 夏希 25

【農業科賞】

農業科の勉強で学んだこと		上三宮小学校	三年	佐瀬 果暖	26	想像とちがった農業科	第二小学校	五年	田部 慎也	33
はじめてそでた大豆		関柴小学校	三年	加藤 凜夏	26	米作りの苦勞を知って	第二小学校	五年	土屋 心菜	34
一生けん命みんなで育てたトウモロコシ		塩川小学校	三年	渡部 萌衣	27	農業っていいね	慶徳小学校	五年	長谷部 優	35
みんなで作った南瓜		第一小学校	四年	二瓶 旬花	28	こめられた思い	姥堂小学校	五年	大原 嬉博	36
農業科と笑顔		上三宮小学校	四年	大八木 諒	29	笑顔と努力の米作り	駒形小学校	五年	新田 和里華	37
たいへんだ！ダイコンに虫がいた！		第三小学校	四年	目黒 陽路	30	「いただきます」の一言	山都小学校	五年	齋藤 水月花	38
えだ豆のしゅうかくで学んだこと		加納小学校	四年	佐藤 ひな	31	米づくり	山都小学校	五年	笠井 文彰	38
水分ほうふな夏野菜		姥堂小学校	四年	須藤 陽平	32	おいしいお米とそのひみつ	高郷小学校	五年	長水 萌	39
農業科に対しての思い		第二小学校	五年	石井 大地	32	自然を理解し、感謝する	第一小学校	六年	菊地 寿来	40

農業を通して分かったこと	第二小学校	六年	坂井 佑那	41
農業を通して学んだこと	松山小学校	六年	若菜 彩華	42
農業を経験して	松山小学校	六年	瓜生 晃大	43
地道な努力が実を結ぶ	松山小学校	六年	鈴木 凜乃	44
小学校最後の農業科	関柴小学校	六年	鈴木 莉佳	44
自分の家で学んだこと	熱塩小学校	六年	菅井 日花里	45
農業の大切さ	熱塩小学校	六年	猪俣 瑞希	46
農業に出会えたうれしさ	堂島小学校	六年	廣瀬 茅春	47
全ては「気持ち」	塩川小学校	六年	佐野 茜奈	48
農業科の体験で一番おどろいた事	駒形小学校	六年	川井 稜太	49

編集後記

作物に「ありがとう」	駒形小学校	六年	尾崎 青音	50
作物への感謝	高郷小学校	六年	和田 修一	51

【大賞】



農業の力

豊川小学校 五年 佐原 凜香

わたしは今年初めて米作りを体験しました。昨年までは、野菜を育てたことがあるけれどお米を作るのは、初めてのことでした。

最初は、

「ちゃんと育てられるかな。」

と、ちよつと不安な気持ちでした。わたしの家でも、お米をつくっています。あまり手伝ったことはありません。でも田植えの時に手伝ったり、お家の人がやっているのを見たりしていると、大変そうだなということがわかりました。あまりやる気のなかったわたしですが、農業は力をくれたのです。力といっても人間のような「力」ではなく、心にとどく力だったのです。

まずは、「苦勞を感じる力」です。苦勞は田おこしにありました。作業のほとんどは、只浦さんが機械でやってくれたのですが、田んぼを自分の力でたがやすのは大変だったし、苦勞を感じました。

つぎは、「勇氣を持つ力」です。その力は苗植えにありました。田んぼに苗を植えるのには、田んぼに入らなければなりません。ドロドロの田んぼに入るのには、とても勇氣が必要でした。勇氣を出して入って見たら、だいじょうぶでした。

そのつぎは、「思いの力」です。その力は稲かりにきました。わたしたちはかまでやりました。今は便利な機械があるけれど、昔は手作業でやっているの、大変だなあと思いました。

そして今、とてもうれしいことがありました。わたしたちが作った米が、金賞をとることができたのです。その時も力がきました。「感謝の力」です。今まででいいいに米作りを教えてくださいださった只浦さんや、お手伝いいただいたみなさんに感謝です。その時気がつきました。いろいろな力をくれたのは農業で、農業にも感謝しなくてはと。わたしたちにいろんな力をくれた農業にも一言。「ありがとう。またがんばりますね。」



わたしにとって農業とは

第三小学校 六年 大塚 千晴

「農業科ってなあに。」

と喜多方以外の学校の子供や大人の人に言われることがあります。説明すると、

「すごいね。」

「子供のうちからやると勉強になるね。」

と言われます。そのことをわたしはほこりに思っています。

わたしの家は、農家で米や大豆を作り牛を育てています。昔はかきとりもやっていて秋は特に大いそがしでした。

野菜はおばあちゃんがたくさん作るので、やり方を教えてもらうことはできますが、手伝いくらいしかやらないので最初から最後まで作り方を知るなんて「めんどくさい」と思っていました。そんな時、「わたしにとって農業とは

何だろう。こんなに身近に農業という仕事があるのに、なぜやらないのだろう。もつとちゃんと教えてもらった方がいいのか。」と思いました。だから朝早く起きた日におばあちゃんと野菜を取りに行ったり、わらを運んだり、前よりお手伝いの量を増やしました。やっていくうち「楽しい。」と思えたし、いつもの倍「おいしい。」と感じました。学校で農業科をやっていて、わたしと同じように、楽しいとかおいしいとかみんなが思っていたので、とてもうれしい気持ちになりました。それに、その野菜がきれいな人もその野菜を好きになってくれるともつとうれしいと思いました。遊んだり、おしゃべりしたりすること以外にも、食べ物を作ると楽しいと思えることがあるんだと思いました。

わたしにとって農業とは、すごく身近にあつて時には大変な苦勞をするけれど「楽しい。」や「おもしろい。」「うれしい。」など明るい気持ちになれるいいものだと思います。わたしは農業ができてよかったと思いました。こんなに楽しいと思えることを教えてくれた農業にありがとうと思えました。あなたも農業で野菜づくりをがんばってやってみては。



ぼくの「いただきます」

豊川小学校 六年 遠藤 星矢

「いただきます。」

これは食事をする時のあいさつの言葉。ぼくは、「おはよう」や「おやすみ」と同じように習慣だから使っていた。それだけだった。

ぼくのこの二年間の農業科は米づくりを行った。その体験で感じた事は二つある。一つは、植物の成長のすごさである。最初に行った種もみまき。一センチメートルにもならない種もみから二週間後には、五センチメートルをこえるほどの苗が育っていた。ぼくは、そのスピードに驚いた。昨年もそうだったのかもしれないが、昨年は活動の内容ばかりに頭がいつて、苗が育つ速さを感じることはできなかった。しかし今年は違う。実りの秋に向けて確実に、力強

く成長し続けているのだ。いつ田んぼに行っても、成長を感じることができた。前回に比べ、苗の長さがのび、色が濃くなっている。とても速いスピードで育つ苗に、ぼくは生きているという強さやたくましさを見せつけられたように思えた。農業科で感じた二つ目の事は、米づくりの大変さである。すごいスピードで育つ苗のサポートをしてやらなければ、お米の収穫にはたどりつけない。その仕事はどれほど大変なものであった。田おこしでのくわは重く、田植えでは、ぬかるんだ田の中で足をとられ思うように進めず、稲かりではうまくまで切れず……。簡単にこなす支援員さんや農家の方々はすごいと思った。そして収穫祭の時、たきたてのご飯でおにぎりをつくった。おにぎりをにぎる時、熱くてなかなかにぎれなかった。いつもすぐおにぎりをつくる母のすごさを感じた。

二年間の米づくりで、ぼくの「いただきます」は変わった。米の一粒、一粒に生命があり、育てる人の、料理する人の手が加わっているのだ。それを何もしていないぼくが、いただくのだ。ありがたく、そしてぼくも誰かのために働ける人に成長できるようにがんばろうという思いを忘れずに言おうと思う。大きな声で「いただきます」と。



農業っておもしろい

慶徳小学校 六年 五十嵐 聖加

「聖加手伝って。」

「えー。また。いやだなあ。」

今までの私の心の中は、こういう気持ちでいっぱいでした。

私の家は農家です。主にキュウリを作っていて、忙しくなると父と母だけでは足りず、声をかけられることも増えます。分かってはいても面倒くさくてやりたくはありませんでした。

でも、農業科の授業がきっかけで少しずつ気持ちが変わっていきました。

今年の農業科では、昔ながらのやり方で米作りを体験しました。特に楽しかったのが脱穀です。ペダルを足でふむ

と中の針のようなものがついた筒が高速回転します。そこに稲の束を少しずつ押しながら入れるとあっという間に稲から実が取れます。全ての実がきれいに取れるのでとてもすっきりします。楽しくて何度もやらせてもらいました。

とうみで重い実と軽い実とごみに分けられます。これもおもしろいように分けられていきました。手でハンドルを回し、風を送るだけなのに三つに分かれるなんて不思議でした。こんな風に昔ながらの米作りを体験していくうちに、一つ一つの作業がおもしろく感じられるようになりました。それからです。家での手伝いに対する気持ちが変わったのは。今まで声をかけられてしぶしぶ手伝いをしていたのが、自分からやろうと思うようになりました。父や母が畑に出る時に思いきってついていったのです。その日は、キュウリの長さを測って切る作業でした。切っていいかどうか聞きながら気をつけてやりました。しばらく手伝うと、「ありがとう。」

と母に笑顔で言われ、とてもうれしい気持ちになりました。もう、今の私は、農業がきらいではありません。むしろ農業っておもしろいと感じるようになりました。



農業の願い

堂島小学校 六年 関本 悠太郎

「最後の一つぶまで残さずに食べよう。」

ぼくは、農業科で米作りを学習し、米ができるまでには多くの苦労があることを、身をもって体験しました。それからは、当たり前のように言っていた「いただきます。」の言葉にも素直に感謝の気持ちがわいてきました。

昔ながらの米作りでは、みんなが協力し合って作業を進めていかなければいけません。一人の力では困難な作業も、友達と力を合わせ乗りこえることで、助け合いの精神を学びました。

最初は苦労ばかり感じていた作業も、稲が生長する姿を間近で感じながら、次第に命を育てる喜びへと変わっていききました。ぼくは、稲の生長と共に、自分の心も豊かに育

っているような気がして嬉しくなりました。

また、農業体験では、自分の肌で自然を感じることができます。土の中のひんやりした感触、緑一面に広がる稲のにおい、わらのやわらかい温もり。触れるもの全てに、大地の恵みが宿っているようでした。

はるか遠い昔から、代々受けつがれてきた田んぼは、今も変わることなくおいしい米を育ててくれます。小さな一つぶの米にも、先人達の歴史がつまっているように感じました。

だからこそぼくは、大切な米を粗末にはしてはいけなく強く思うのです。

しかし、食生活が欧米化し、米の消費量は、減る一方です。ぼくは、昔からその土地に根づいた食文化こそが、丈夫な体を作る基本だと思います。ぼく達の祖先是、生まれ育ったこの土地で米を作り、命をつないできたのです。まさに、米こそが命を生み出す源なのではないでしょうか。

どんなに時代が変わっても、食べ物大切さは変わりません。歴史ある土地を大切に守り、米作りの伝統を受けついでいくことが、ぼく達の役目なのだと感じました。古里のすばらしい文化を絶やすことなく未来に残せるように、しっかりと農業を学びたいです。

【優秀賞】

おいしくなあれ、おいしくなあれ

第三小学校 四年 山 凜太郎

ぼくが今年、農業科でおいしくできたなあと思った野菜は、人参です。

人参は、五月七日に種をまきました。まいた時は、どのくらい大きくなるか、おいしくなるかが楽しみでした。

種をまいたあと、天気が良かったので、じょうろで水をあげるようにしました。その時は、どのくらい大きくなるかどのくらいおいしくなるかの他に、どんな芽を出すのかなあということも、とても楽しみでした。

その後、芽がなかなか出てきませんでした。ずい分ずいから畑へ行って様子を見たら、小さい芽が出てきていました。ぼくは、こんなに小さい芽なんだ、これでどのくらい大きくなるんだろうと、とても不思議に思いました。

それから、何度も見に行きました。草むしりもたくさんやりました。おいしくなあれ、おいしくなあれと言葉をかけながら、やりました。ある日、人参が細いけれど、できていました。ぼくは、その時やったという気持ちでした。

ぼくはそれを家に持ちかえり、家族で食べました。そしてらおばあちゃんも、

「おいしいね」

と言ってくれました。作ったかいがあったなあと思いました。

また、学校でも収かくした人参を使って料理をしました。作った料理は人参ピラフと人参たきこみごはんです。どちらもおいしかったけれど、ぼくは、人参ピラフの方がおいしいなあ思いました。なぜかというと、塩とこしょうがまざりコンソメの味も重なって、人参がすごくおいしかったからです。

今は、大根を育てています。大根も、人参の時のように大切に種まきをしました。おいしくなるように、しっかりお世わをしています。おいしくなあれ、おいしくなあれと言葉をかけながら草むしりをしています。人参作りでうまくできたやり方で、大根も大きく育てて、料理するのがとても楽しみです。

ありがとうジャガイモ

塩川小学校 四年 五十嵐 和奏

今年さいばいするのは、「ジャガイモ」だ。わたしはやったと思った。なぜならおじいちゃんの家で作っているし、なんどもいもほりを手伝っているからだ。そしてなにより、わたしが好きな野菜だからだ。

六月。種いもを植えた。植えたのは、初めてだったので、楽しかった。何日かたって、畑に行くと小さな葉っぱが出ている。これからどうやって育つか楽しみになった。

それから、しばらく晴れの日が続いた。

「いもは、大じょうぶかな。」

と少し心配になった。

「そうだ。」

去年もそうだった。晴れが続いてさつまいもはかれそうになっていった。そういえば、心配で水をあげに行ったわけ。

わたしは、少しかん単に考えていた。そうだ、農業は生き物を相手にしているのだ。わたしたち人間が、どうお世話するかによって野菜のき方も変わる。おじいちゃんも朝早くからお世話をしていた。去年わたしたちもいろいろお世話をした。野菜が変わったからといって何も変わることを

はない。それから、観察で見に行くときは、よく見るようにした。草むしりも一生けん命やった。

九月。しゅうかくをした。自分が植えた所からは、たくさんジャガイモができてうれしかった。その後、学校でしゅうかくしたいもをカレーにした。大きいジャガイモがゴロゴロとたくさん入っていた。大きかったけど、とてもやわらかかった。やっぱいいもはおいしい。おもわず笑顔になってしまった。

でも、よく考えてみた。このカレーの中には、ジャガイモだけじゃなくて玉ねぎ、人じんなどの野菜などがたっぷり入っていて、お米もある。なにげなく食べているのこの一皿に一体どれだけの人が関わっているのかと思うと気が遠くなる。野菜の一つ一つやお米の一つぶ一つぶに農家の方がたの気持ちや努力がたまっているかと思うと感しやしい気持ちになった。来年も農業科が楽しみだ。

おじいちゃんの作るお米

第一小学校 五年 齋藤 春都

「ごちそうさまでした。」

今日もぼくは真っ白くてきれいな美味しいご飯をお腹いっぱい食べた。

ぼくの大好きなお米は、上三のおじいちゃんが作っている。ぼくも春の田植えの時期になるとお父さんと一緒に手伝いに行く。だけど、学校の授業で「食料生産」について勉強するまで、とても長い時間と手間をかけて一生けん命作られている事を知らなかった。そして、農業科の学習で、クラスのみんなと一緒に『種まき』や『田植え』『稲刈り』などを体験して本当に大変だという事が分かった。

おじいちゃんもお父さんも、農業が仕事ではないけれど、休みの日に田んぼの仕事をしている。お店に行けば売っているのになんで大変な思いをしてまで作るのかと思った事もあるけど、出かけた時にお店で食べるお米よりも、家で食べるお米の方がずっと美味しいと感じたことが何度もある。それに作る人がいなくなつて、あれてしまった田んぼを見ることがよくある。おじいちゃんの作るお米がぼくは一番美味しいと思うし、おじいちゃんの家に向かう時に見る田んぼの風景は、金色のじゅうたんのようにとってもきれいで、この風景があれしてしまうのは、ぼくは悲しいと思う。だからぼくは、大変だけどおじいちゃんにも、お父さんにも頑張つて美味しいお米を作ってもらいたい。

ぼくももっと大きくなったらトラクターだつて運転するし、今よりももっと手伝える事が増えると思う。そして今度はぼくが作ったお米をおじいちゃんに食べてもらいたい。今ぼくにできる事、それは学校の授業で色々なことを学ぶ事と、色々な事を体験する事だと思う。そして、おじいちゃんや農家の人が一生けん命作ってくれたお米や野菜を残さず食べる事だと思う。ぼくは今できる事を一生けん命やつて夢をかなえたい。

今日も感謝をこめて、

「いただきます。」

一つぶ一つぶの大切さ

第二小学校 五年 大野 双葉

「ご飯は苦手ー。」

これが給食のときのいつものわたしでした。それが今年の農業科で変わったのです。

わたしたち、五年生は米作りを行いました。まず心に残ったのは、田植えでした。今は、かん単に機械で行っていますが、わたしたちは、手作業で行いました。ぐじやぐじ

やの土にはだしで入り、植えていくのです。三本ずつ苗を持ち、緑の部分が少しかくれるくらいに土にうめます。前に進むにも、土から足がなかなかでないのてたいへんでした。わたしは、二列植えていきましたが、足はどろどろで、腰もいたくて、何日も田植えをやっていたむかしの人はすごいなあと思いました。

稲は、緑色が成長し、秋には黄金色にかがやくようになりました。いよいよ稲かりです。みんなでかまをもって、どんどん切りました。かまを使うのは初めてだったので、こわくて不安でしたが、農業支援員の方や先生がていねいに説明してくれたおかげで、どんどんかることができました。かるとき、それを運ぶとき、稲や穂が少しづつ落ちてしまします。わたしは、友達ともったいなくて、いっしょうけん命に拾いました。すると、

「落ち穂拾いは大切なんだよ。」

と農業支援員の方にほめられました。自分たちで育てたお米なので、大切にしたいくて田んぼのすみからすみまで拾って集めました。

できたお米は、収穫祭でおにぎりにして食べました。自分で作ったお米は、あまくてとてもおいしかったです。そして、落ち穂拾いのことを思い出していました。むかしの

人にとつては、もっともつと大切な一つぶだったんだろうなあと思うことができました。

わたしは、農業科を通して、ものの大切さ、お米一つぶ一つぶの大切さを学ぶことができました。

「ご飯だ。やったー。」

わたしの給食の時間が変わりました。今日も一つぶ一つぶ、大切に食べようと思います。

いね一本の大切さ

慶徳小学校 五年 石田 あめり

「わたし、かまでかれるかなあ。」

いねをかるのが初めてのわたしは少し不安でした。しえん員さんが、

「こしを曲げて、いねをもったら、かまを自分の方にもつていって。でも、足は切らないようにね。」

わたしは、かまにカバーをつけたまま、いねをかるまねをしてみました。なんとなくコツが分かり、できるような気がしてきました。

田んぼに入って、しえん員さんの言った通りにいねをか

りました。ザクツという気持ちがいねを見る
と束になってきれいにできていました。自信がついたわた
しは、どんどんかっついてきました。でも、わたしは、つい
束になったいねを土手に投げてしまいました。するとしえ
ん員さんが、

「どうして投げるの。もっといいいねにあつかってあげて
ちょうだい。」

と少しおこったように言いました。わたしは、そんなにお
こらなくてもいいのと思いました。

そして、わたしがかったいねを、コンバインのベルトに
通していると、さっきのしえん員さんが、こしを曲げて何
かをやっていました。わたしは気になって見てみると、み
んなが落としたいねを一本一本拾っていました。びっくり
したわたしは、しえん員さんがさっきおこりながら言った
理由が分かりました。「このしえん員さんはいね一本でも
大切にしているんだ。」と思いました。わたしは、さっき
いねを投げた自分はずかしくなりました。どれだけ農家
の人が米を大事に思っ育てたかを考えました。四月から
十月まで、きつといつも頭の片すみから田んぼのことが、
はなれなかったのだと思います。天候、病気、虫、ひ料な
どいくつもの課題をクリアして、やっとむかえたいねかり

なのです。わたしは、しえん員さんのひとことで農家の
人の心に少し近づけたような気がしました。

農家の心

関柴小学校 六年 加藤 泰熙

「消費者に安全な米を食べてもらう。」

と、言ったのは、一人の支援員の人だ。ぼくは、今年六年
になって二度目の米作りをした。今年は昨年とちがいで、う
るち米を育てた。種もみをまいたとき昨年とちがう事に気
がついた。それは、種もみをまいたところがつかるまでび
しょびしょに水をかけた。これをプール方式というらしい。
この方法は、水がかれないように毎水をやらなければい
けない。ここで一つ疑問がうかんできた。田んぼに直接ま
いてしまえば楽なのに、なんでわざわざハウスを作って育
てたのか。それは、後で本を読んで分かったのだが、苗は
低温・高温・乾燥・多湿をさけて育てなければいけないか
らだ。そうじゃないと、稲が病気になるなどいろいろ大変
だったのだ。稲の病気を治すには、薬をつかわなければい
けない。

「農薬を使わない。」

そう言った支援員さんは、薬を使うわけにはいけないので発病させないようにしなければならぬのだ。支援員の人には、自分の利益よりも、食べる人の安全を考えて育てているということが、支援員の方の言動からわかる。

農作業をやっている方々は、自分のことよりも、他人のことを第一に考えて行動していると思う。もちろん、全員がそうとは、かぎらないが、大半の人がそうだと思う。このことは、農業だけではなく、日常生活にも役立っていると思う。この農家さんたちが持っている心は、自分達も見習わなければならない。現在、農家の人の数は年々大きく減ってきている。それは、若い人が、収入が不安定な農家よりサラリーマンになっているからだ。これは漁師にもあてはまる。だから、ぼくたち若い世代は、農家の心を見習っていくべきだろう。現代の人間社会には、農家の人の心を身に付けければ、よりよい社会になるのではないだろうか。だから、ぼくも、農家の人の心を見習って、役に立つような人間になりたいと思う。

農業への思い

熊倉小学校 六年 工藤 葵

ぼくは、農業に対し、去年とはちがう思いを持っています。

二年前から農業っておもしろいななど思いはじめ、農家をやってみようかなと考えようになりました。でも、今はそんな思いではなく絶対やりたいと思うようになりました。そんな気持ちになったのは支援員さんや地域の方々、祖父母を見たからです。

今までは、農業っていいな、楽しいなと思って農業科を学習していました。確かに楽しくていいとは思いますが、そんな軽い考えでは、だめです。命をあずかりそれを立派な野菜へと育て上げなければならないのです。だから、種や苗は人と同じ赤ちゃんであり、その赤ちゃんを小さい時から愛情込めてちゃんと育てないと立派な野菜にならないのです。それに、作物は手を抜くと枯れたり病気になったりしてしまいます。だから、工夫して命を守らなければならないのです。野菜を育てることは人を育てることとよく似ていることに気づきました。

また、天候などを考え対策したり、朝早くから夜遅くま

で小屋や畑で作業したりしている祖父母を何回も見たことがあります。そこには、命をあずかっているからがんばらないと、という強い責任感があるとその時感じました。また、作物のことを第一に考えるやさしい思いが感じられます。それに、おいしい野菜になるためには水やりをしたり、ずっとこしをおろして草をむしたりしなければなりません。足こしが丈夫になつて体力もつくので体によい職業であると思いました。

このように、農業は命の大切さがわかり、責任感、やさしさが生まれ、体力がつくというよさがあります。つまり、農業は最高の生き方なのです。だから、ぼくは将来立派な農家になるために、ほこりをもつてしっかりと努力していきます。

農業科から教えてもらったこと

熊倉小学校 六年 井上 温斗

ぼくは、小学校で初めて農業をやった時に種まきなどをする楽しい授業だと思っていました。しかし、毎日の水くれや授業での除草は、「面倒くさいなあ。」と思うこともあ

りました。

三年になつて本格的に野菜作りをするようになって「作物への水くれや草むしりをし、育てて、最後には収穫しおいしく食べる。」それが農業だと思ふようになりました。確かに、そういうことをするのが農業かも知れませんが、それは本当の意味の農業ではありません。六年になつた今では、クラスのみんなで水くれや草むしりをしたり収穫したりする時に、「協力し合つて友情を深め合う。そして、収穫できることに感謝すること。」これこそが農業の真の意味だと考えるようになりました。水くれや草むしりなどのお世話を何回も繰り返すうちに友情も徐々に深まってくのがわかりました。一人でできないことも友達とならできるのです。仲間がいるからがんばれるのです。このことに気づいてから友達が困っている時や大変な時に助けあげようと心の中で意識しているところを実行することができました。人の心まで変えてしまう農業はすばらしいと思いました。

農業は作物を育てることを通して協力し合い友情を深めることのできるすばらしいことなのだと多くの人に伝えたいと思います。そして、中学校へ行っても農業から学んだことを忘れず、友達を思いやった親切な行動がとれるよう

努力していききたいと思います。また家でも農業をやっているの、手伝いをする事で家族への恩返しをしていきたいとも考えるようになりました。

そんな気持ちにしてくれた農業に感謝したいです。農業科と出会い、大切なことを学ぶことができて本当によかったです。

私に今、できること

豊川小学校 六年 東條 菜々子

今日は収穫祭。私は調理係で、みそ汁やおにぎり作りで大忙しだった。でもとても嬉しかった。収穫したお米を食べられる事が。今までの大変だった活動がつやつやのおにぎり変わったのだ。それに私達の作ったお米が世界のコンクールで金賞になったのだ。私の心は収穫を喜ぶ気持ちであふれていた。

収穫祭の時、農業科支援員の只浦さんが、

「毎年、できた米の質や大きさ、味は違う。」

という話をしてくださった。考えもなかった。昨年のお米と今年のお米が違うなんて。同じ人が同じ事をしている

のに米の質も大きさも違う事を不思議に思った。そしてはっとした。やる人や内容は同じでも、天候、気温が違うのだ。夏がとても暑い年もある。いつまでも寒いままの春がある。今年のように雨ばかりが続いていた秋もある。そんな人間ではどうしようもない自然環境に、農業は対応していかねばいけないのだ。難しいと思った。米の事をよく知り、今までの経験や知恵を使って育てていくのだ。大変な事なのだろうなと人事でしかなかった地球温暖化などの環境問題が、ここ喜多方にもあるのだと実感した。そして只浦さんは、

「米は子どもと同じ。」

とおっしゃった。母が産んだ私と弟。でも全く同じではない。そしてそれぞれに違う接し方を、愛情をもって両親はしている。米もその年々に合った対応をしていく事が大事なんだと思った。米に愛情をこめて。

つやつやのおにぎりは、昨年とは違う、金賞のお米。只浦さんの教えのもと、みんなが自然に挑戦してみのったお米。うん。おいしい。私の農業科は今年で終わる。そう思うときみしい気がする。でも来年もおいしいお米ができるように、私にできる事はないだろうか。農業は自然環境に挑む事と知った今、自然環境について調べ、よりよい環境

である様、私にできる事を探そうと思う。何ができるだろう。自然環境を守るために。

農業科で学んだ思い

加納小学校 六年 森 夏希

私は、この農業科で「ありがとう。」という感謝の気持ちを学びました。

私は、六年生になり昨年も学習した米作りを、今年も学習しました。私は、去年とちがって食べ物に対する思いを込め活動をしました。「大きく育ってね。」「おいしくなつてね。」など色々な気持ちを込めてみました。なぜかというと、それは支援員さんの言葉の中に答えがありました。

ある日、支援員さんは、作業を始める前の私達にこんなことを言いました。「種、苗、米全部、どれも生き物だ。大事にしていねいに作業しろよ。」と。私は、「大事に」の意味がよく分かりませんでした。ちゃんと取っておく、汚さないよう、などと想像もできませんでした。でも、除草作業や稲刈り、脱穀など色々な活動をしていくうちに、少しずつ分かってきました。それは、親が子どもにあたえる愛

情のように声をかけ、みんなと協力しろということだと、私は気付きました。

声をかける、友達に言うあいさつのように、大きい声でなくても心の中でおいしい米になるようにと思いを込めるのです。「たったそんなこと。」と、思う人もいるかもしれませんが。でも、私は、この一言でどれだけおいしさが変わるか知っています。

今年十一月に赤飯配りがありました。一人暮らしのお年寄りに渡しに行きます。昨年も今年もとっても楽しみにしてくれています。それは、思いを込めて育てたからだと思います。

私は、この一年間色々な思いを学びました。活動をしている時は、「大きく育ってね。」などと言っていますが、食べる前、食べている時は、「ありがとう」と思っています。こんなにもおいしく育ってくれてありがとうという米への感謝、手伝ってくださいっている支援員さんへの「ありがとうございます。」という感謝の言葉です。

【農業科賞】

農業科の勉強で学んだこと

上三宮小学校 三年 佐瀬 果暖

十一月七日は、一ヶ月前にいねかりをしたお米をみんなでおにぎりにして食べる日であり、上級生が、自分たちで作った、大根やさといもや白さいをいも汁にして農業しえん員やわたしたちにごちそうしてくれる日。そしてわたしたちが畑で作ったポップコーンを調理してしえん員さんや全校生に食べてもらう「しゅうかく祭」の日です。

わたしたち三年生九人と二年生二人の十一人で、八十八人のポップコーンを調理したので、すごいそがしかったです。ホットプレートに百五十グラムのコーンと油と塩を入れて、待つこと五分。はじける音が聞こえたらコーンがこげないようにホットプレートの温度を少しずつ下げていって五分。はじける音が聞こえなくなったらできあがり。それを二つのホットプレートで四回ずつくり返し、ビニールぶくろ八十まいにふくろづめをして、食どうのテーブルにならべる。同時に自分たちで食べる

おにぎりを作らなければならなかったの、ねこの手もかりたい気分でした。

しえん員さんもそろって食どうで「いただきます。」のあいさつをしたときは、正直くたくたでした。でも、いも汁の白さいはとろけていて、とてもおいしかったです。わたしたちがいねかりをしたおにぎりは、お米の味がしっかりしていて、すごくおいしかったです。

食べながら思ったことは「何でも感しやして食べる」ということです。作物を育てる大へんさ、作物を調理する大へんさを感じたので、これから食事をするときは感しやをしながら食べたいと思いました。それから、家の畑で作物を作っているおばあちゃんのお手つだいをして、心のこもった野さいを作って、家ぞくに食べさせたいと思いました。

はじめてそだてた大豆

関柴小学校 三年 加藤 凜夏

わたしは、はじめて大豆をそだてました。たねをうえるとき、わたしは、とてもふあんでした。なぜかというと、

まちがえてあなをふかくほっちゃったら、どうしよう。と、思ったからです。ふかくほりすぎてもだめだけど、あさすぎてもだめです。でも、なんとか先生に教えてもらってうえることができました。

少したつて、めが出てきました。とても小さくて、かわいかったです。

草が生えてきて、草むしりをしました。とてもあつくなりしました。のうぎょうをしている人たちは、とてもたいへんなんだな。と、思いました。

そして、どんどん大きくなりました。きみどり色のえだ豆に、なったのです。このままでもいいから、早く食べたいなあ。と、ずっと思っていました。

とうとうしゅうかくの日です。わたしは、とても楽しんでました。ぬくときに、ぐん手をはめてやっただけで、ちくちくして少しいたかったです。落ちている大豆も拾いました。こしが、いたくなりました。

そして、さやから、大豆を取りました。なかなかとり出せなかったのです。とてもつかれました。こんなに大へんな仕事をしているって、すごいな。と思いました。

さいごに、大豆をつかって、ココア大豆をはんに分かれて、作りしました。自分たちで作った大豆のおかしは、売っ

ているおかしより何倍もおいしかったです。

つぎの日、お弁当の時に、きのうあまったおかしをれいぞうこに入れていて、ひえたおかしを食べました。つめたいのもの、おいしかったです。

のうぎょうをしている人たちは、たいへんだな。と思いました。

一生けん命みんなで育てたトウモロコシ

塩川小学校 三年 渡部 萌衣

私たち三年生は、トウモロコシをうえることになりました。た。

「トウモロコシができればポップコーンを作って食べます。」

と、先生がいました。

ポップコーンは知っていたけど、トウモロコシからできるとは知らなかったのです。トウモロコシがどうやってポップコーンになるんだろうと思いました。

六月にたねをまきました。たねをまいてからめがでてきてちよつとずつ大きくなって葉の数もふえてきました。水

をやったり手入れをするうちに私たちのせより大きくなりました。

夏休みに入ってトウモロコシのせいちようが楽しみでした。夏休みのあいだは友だちが水をあげたりざっそうをぬいたりしていました。私もときどき気になってみに行っていました。みんなで協力して育てたかいあって大きく育ちました。実もたくさんりました。

しゅうかくしてから学校のはんかんに、ほしておきました。

やつと、トウモロコシでポップコーンを作る日がきました。私やみんなは、

「あんなに小さいつぶから本当にポップコーンなんてできるのかな。」

と、ふしぎでした。

小さいなべに、油を入れました。そこにかんそうしたトウモロコシを入れます。ふたをして、トウモロコシのはじける音になるのをしずかに待ちました。トウモロコシのはじける音がなべの中で聞こえてきてわくわくしました。私たちが作ったトウモロコシがポップコーンになっているんだなあと思つてうれしかったです。

自分たちが育てたトウモロコシから作ったポップコーン

は今まで食べたポップコーンの中で一番おいしかったです。

みんなで作った南瓜

第一小学校 四年 二瓶 旬花

四年生は、南瓜を育てました。豊子さんの家の畑で、六月二十二日に、南瓜の苗植えをやりました。その苗植えでは、まずマルチに穴をあけて、苗を植えた後に水をあげました。そして、緑色のわくをつけて、黄色いひももつけました。その作業をやることで、緑色のわくや、黄色いひもが鳥よけになることが分かりました。カラスなどの鳥は、羽を大切にする鳥なので、そのひもには近づかないということも、豊子さんに教えてもらいました。それで、その黄色いひもには、工夫がしてありました。その工夫とは、ただのひもではなく、キラキラがついているということです。キラキラがついていると夜でもひもがあることに気付いて、カラスなどの鳥がよつてこなくなります。

いよいよ、九月十四日に南瓜の収穫に行きました。南瓜の収穫では、収穫しながらつるを一カ所にまとめる作業をやりました。その作業では、たくさんの長いつるが

あり、びっくりしました。でも、そのたくさんをつるを取って畑がキレイになったのでよかったです。南瓜は、大きいのが小さいのがありました。それを、みんなで手分けして学校へ持って帰りました。南瓜は、一度検査をしてから、一人二個ずつ持って帰りました。

そして、総合の時間に、あまった南瓜を材料にして、カレーを作りました。カレー作りではみんなで一生けんめい作りました。とてもおいしいカレーになりました。やっぱりみんなで作った南瓜は、とてもおいしかったです。家に持って帰った南瓜は、おばあちゃんに料理してもらいました。家族も、

「おいしいね。」

と言っていました。その言葉から、みんなで南瓜を作ってよかったなあと思いました。そして、色々なことを教えてくださいました。豊子さんにもお礼を言いたいです。

農業科と笑顔

上三宮小学校 四年 大八木 諒

「畑に行くよ。」

と先生が言った時、ぼくは、びっくりしました。なぜなら、かぼちやのなえがあったからです。

上三宮小学校の四年生は、五月に大豆の種と、かぼちやのなえを植えました。ぼくは、

「大きくなれよ。」

と言っても、なえはピクリともしませんでした。

でも、その少し後の田植えが終わったころ、水くれ当番で畑に行くと、かぼちやのなえがし柱と同じくらいになっていました。（ひまわりみたいに高く成長するのかなあ。）と楽しみにしていました。

大豆も、葉に水をかけるとはね返ってきて、当番の日はズボンがぬれてしまいました。

その当番の日から、大豆のこととかぼちやが心配でした。三年生の時、ざっ草がとても育っていて、かれていた大豆が少しあったからです。でも、七月に草むしりをしたからそんなにも心配ではなくなってきました。

しかし、そううまくはいきませんでした。ざっ草は去年よりは小さかったものの、根が強くはっていて、なかなかぬけません。物語の「大きなかぶ」みたいに、四人で一本、一本ぬいていきました。

かぼちやは、小さいかぼちやや花がさいているものもある

って、畑に來ると、一回に二つとれる位しゅうかくしました。

大豆は、たくさん育ったので、しゅうかくするのが大変でした。また、大豆をさやから出す作業は、何時間もかかりました。それから、虫にくわれた豆やごみなどを取りのぞく作業もしました。食べられるようになるまでに多くの時間がかかりました。

農業は、大変な仕事だと思います。でも、食べてもらうと笑顔になれるから、がんばれることを、この農業科で教えられました。来年も、いろいろな作物を育てて、一つでも多くの笑顔をふやしたいです。

たいへんだ！ダイコンに虫がいた！

第三小学校 四年 目黒 陽路

四年生は、ダイコンを育てました。ダイコンはすぐそだつけれど、虫がいました。その虫をみんな初めて見ました。ぼくは、この虫なんの虫だと思って、虫を取ってよく見ました。プニプニして、くすぐったかったです。先生が、「その虫、どんな虫？」

と言っていたので見せてあげたら、先生もその虫が分かりませんでした。よく見ると、ダイコンの葉っぱのうらや葉っぱの間にたくさんいました。

それに、となりのキャベツにも少しいました。ぼくは、「このまま虫に食べられていくと、作ったダイコンは、食べられなくなるなあ。」と、不安に思いました。

だけど、その一週間後、その虫の正体はヨトウガ（ヨトウムシ）でした。ぼくは、その結果が分かって、よかった、名前が分かったぞと、ほっとしました。ヨトウガは、寒くなると土の中にもぐって、とうみんして出てこなくなるので、大じょうぶと分かりました。自分たちが作ったダイコンは、これでぶじ食べられると思い、うれしかったです。

家で、ダイコンをに物にして食べたらずわらくておいしかったです。農薬を使わないで育てるのはたいへんだと思いました。農家の人は、大変そうだなあとも思いました。農業は、水をあげたり、草をむしったり、虫をたいじしたりするので、本当に大変です。農家の人は、こういうことをいっもしなきゃいけないんだ、本当に大変だなあと、思いました。

ぼくは、野菜の好ききらいがまだすこしあるので、それ

をなくして、もつと野菜を味わって食べたいと思います。

えだ豆のしゅうかくで学んだこと

加納小学校 四年 佐藤 ひな

わたしが、えだ豆のしゅうかくで学んだことは、二つあります。

一つ目は、「協力の大切さ」です。わたしが三年生の時は協力ということよりもぬき方やもぎ方をおぼえる方に気がいつてあまり協力した気にはなれませんでした。けれども、今年は二回目だったので、ほとんどのことはおぼえていました。だから、三年生に分からないことを教えたり、土からぬけないものはいっしょにぬいたりいろんなことを三年生と四年生で協力してできたのが一番心に残っています。

また、えだ豆の種まきでは、用む員の先生が、三十センチメートルの間かくごとに印がついているぼうを作ってくれました。作ってくれたおかげで、わたしたちは、苦労しないでまくことができました。でも、用む員の先生はたくさんさんの苦勞をしたんだなと思いました。

二つ目は、「がんばったほど感動はとても大きい」ということを学びました。わたしは三年生の時にえだ豆を全部もぎ終わってから、たらいにあるえだ豆の量にびっくりしました。四年生なってやった時は三年生の時よりもえだ豆の量は少ない気がしました。だけど、三年生の時よりも多く豆をとったり、土から何本もぬいたりとても苦労しました。だからわたしの感動は三年生の時の倍でした。

わたしは、この二つのことを学んで知ったことは、みんなと協力すれば何でもよいことに変えられるということです。例えば、えだ豆をくきの部分からとるのは大変だけど、協力すれば、大変なことも楽しくできることを知りました。わたしは、友達と協力すれば何でもできるのかなと思っていました。でもちがいました。大人との協力もあったからこの一年間やってこれました。だから「協力の大切さ」を深く知ることができました。来年の米作りでは友達以外の大人達にも感謝してやりたいです。

水分ほうふな夏野菜

姥堂小学校 四年 須藤 陽平

ぼくは、四年生になって農業科で、キュウリとトマトの係になりました。

なぜぼくがこのキュウリとトマトの係になったかというと、ぼくは、水々しくておいしいキュウリとトマトが野菜の中で一番好きだからです。以前キュウリやトマトの八十パーセントが水分でできている。だから、育てるときに水を十分に与えることが大切だということのあるテレビ番組を見て知りました。このことを知ってから、ぼくがふつうに食べていたキュウリやトマトがとても水々しくておいしい理由は、農家の人が手間と愛情をかけていたからだということを知りました。このことから、今度は、トマトとキュウリを自分の手で一回育ててみたいなあと思っただけです。

二つの夏野菜を育てるのに一番大変だったのは、やはり水やりと草むしりです。草むしりは、夏の前の梅雨でたくさん雨がふったので、雑草が次から次へと生えてきました。むしってもむしっても雑草が生えてきて、毎日が雑草との戦いでした。

水やりも大変でした。今年の夏は、とても暑くて、一日水をやらないと葉っぱがしおれてしまい、土もかわきつていました。また、ぼくの学校では、水やりは、朝のマラソンが終わってからやります。ぼくは、最後の方まで走っていたので、水やり用のじょうろがなかなか借りられませんでした。やっと借りて水やりをして教室に戻ると、みんな席に着いていることが多く先生に怒られる時もありました。でも、おいしいものを作るために、毎日手をぬかずにがんばりました。何と言っても、八十パーセントが水分でできている野菜です。水やりは、一番大切だと思いました。

しゅうかくの時には、とてもうれしくて、心がわくわくしていました。とてもおいしかったです。でも、ばあちゃんが生えたものよりはおいしくありませんでした。「やっぱり農家にはかなわないなあ。」と思いました。

農業科に対しての思い

第二小学校 五年 石井 大地

ぼくの祖母の家には、少し広い畑と、田んぼがあります。何度かお手伝いをしたことがあるので、農業は身近なもの

でした。でも、お米はつくったことがありませんでした。

二小の五年生の伝統、米づくりがいよいよやってきました。初めての経験なので、とにかくどきどきしました。しかも、機械ではなく、みんな手で田植えをするのです。ぼくは、苗を一目見たとき、こんな青くて小さいのに、どうやってお米にまでなるんだろうと不思議に思いました。

農業支援員の前田さんから、苗の植え方をていねいに教わり、はだしで田んぼに入り三本ずつ汗をかきながら植えていきました。足はどろどろだし、転んで真っ黒になった友達もいました。それでも、五年生全員で植え終わった田んぼを見たときは、うれしくてみんな笑顔でした。

一ヶ月たつと、五センチだった苗が五十センチにまで成長していました。中干しという過程では、一回田んぼの水をぼぼぬいてありました。ぼくは、稲がかれてしまうのではないかと心配になってしまいました。前田さんの話によると、根が深くのび、栄養をたくわえて土も強固になるそうです。

秋、お米の穂が金色になったころ、稲かりをしました。かまを使うのは、初めてでしたが、左手で稲を持ってかとやりやすいと教えてもらいました。五年生全員で五月に田植えをして、そしてかり終わった田んぼを見てぼくは、

みんなとまた笑顔になりました。

その稲の脱こくまで見学しましたが、おいしいお米になるまではまだまだあるそうで、八十八回手間がかかると祖母から聞かされていましたが、それは本当だったんだ、と実感しました。

ぼくは、ふだん食べているお米に、こんなにたくさんの人や手間、時間がかかっていることにおどろいたし、感謝したと思います。ぼくは、農業がさらに好きになりました。

想像とちがった農業科

第二小学校 五年 田部 慎也

ぼくはもともと農業科の授業をあまりやりたくないと思っていました。けれど、今年の農業科で思い方がくなりました。去年までの場合は、手はよごれるし、つかれもでて良いことなんて一つもないと思っていました。それとちがい、今年は手をよごしても、どれだけつかれても、農業科の授業をやりたいと思えるようになりました。

その理由は今年の米作りを楽しんだからでした。

田植えをやるときは、始める前はぜったいやりたくないと思っていたのですが、意外に楽しくて、その後の農業科も楽しいことばかりでした。その中でもいねかりの時間が楽しかったです。初めてかまを使い、初めていねをかつたときは気持ちよかったです。そしてまたいねをかり、もう一度いねをかりと、どんどんかかっていくとまらなくなりました。けれど、楽しい分だけ、体力がうばわれていきました。つかれはたときには、いねがあんなにあったのに、そのいねはきれいに全てかりとられていて、そのときの喜びはとても大きく感じました。去年までの農業科の喜びとはちがう、ほぼ一年間かけてつくったお米は農業科での一番大きい喜びだと思います。最初はあんなに小さかったなえととてもものびたいねはとてもちがいました。緑のなえから、金色のいねは比べ物にならないくらい変わっていました。

ぼくは五年生になり、今までにない喜びをあじわいました。農業にはふつうの日常生活にない喜びをあたえてくれます。なので、これからは農業科のときはやさしくていねいに植えたり、しゅうかくしたりしたいと思います。

今年、作物を作る苦勞を知ったので、どんなにきらいな食べ物の入った食事だったとしても、すききらいなく一食、

一食をきれいに食べて、食べ残しのないようにしっかりと感謝して食べていきたいと思います。

農業は、ぼくの想像とはるかにちがう楽しくてやりがいのあるものになりました。

米作りの苦勞を知って

第二小学校 五年 土屋 心菜

私達、五年生は農業科の活動の一つの中で米作りという体験をしました。つらい日々をのりこえ私達は無事収穫祭を終えることができました。私はそれまでに、いろいろなことを学ぶことができました。

まず、最初の作業は種まきです。残念ながら私達は種まきの活動は体験できませんでした。けれども、その作業は収穫祭までに米作りをサポートしてくれた前田さんと安部さんという方が私達のかわりに作業してくれました。とても感謝しています。

最初に私達ができる作業は田植えです。今の時代はすべて機械で米作りしているところがほとんどですが、私達は手作業で行いました。その中で私は、条板で線を引く体験

ができました。三、四本ずついいねいに植える、そのくり返でした。

私達が次にできる作業、それは稲刈りです。これもまた、手作業で行いました。楽しいという気持ちではなく、私は大変という気持ちでいっぱいでした。そこで安部さんが、「落ちてる米を拾ってください。」

と、言ったのを私は聞いてこう思いました。一つぶ、一つぶがとても大事なんだなと。稲刈りを終えて、私は米作りの苦労、そして農家の人達のありがたさを知りました。

いよいよ次の作業は収穫祭でした。そこには前田さん、そして、サポーターの先生方をおよびしました。そこで私達はみなさんに、今までの感謝の気持ちを伝えました。残念ながら安部さんは仕事の都合でこれなかったけどその自分たちで作ったおいしいお米と、とん汁をみんなで食べました。そこで校長先生がこう言いました。

「お米は一つぶ一つぶが大事です。そして、友達一人一人も大事ですね。」

私はその時に農家の人が一人一人大事に育てているから、私達は一つぶ一つぶを大事にしなければいけないんだなと思いました。

農業つていいね

慶徳小学校 五年 長谷部 優

わたしは、ご神田に足をふみ入れます。気持ち悪いなあと思ってどろの中を歩き苗を植え始めました。（ここは、お田植え祭りで使う田んぼだからきれいにきれいに）わたしは自分に言い聞かせしんちょうに苗を植えました。

「まだ半分だあ。」

という声が聞こえました。人の手でやるのは大変です。これをやってきた昔の人はとてもすごい！。こんなことを考えてスポツとどろに苗を植えました。やっと二列の田植えが終わり、後をふり返ると、みんなで作った達成感が生まれました。もうすでに服がよごれています。しかし、しえん員さんに、

「この列、やって。」

と言われると、また田植えができる喜びの方が強くなり、服のよごれも気にならませんでした。全部終わるとみんなでしえん員さんが作ったおにぎりを、食べました。全員でおにぎりのおいしさと田植えが終わった喜びを分かち合いました。

十月九日成長したたくさんさんの稲をかる時がきました。わ

たしは、とても楽しみにしていました。

最初は、うまくかまを使えなかったのですが、稲をかっていくうちにコツがつかめました。気持ちよく稲かりが進み、みんなのチームワークも合ってきました。と中で、早稲田大学の学生にインタビューされました。

「ねえ、知ってた？学校で農業やるの福島県だけなんだよ。」

と言われ、わたしは、

「そうなんですか！」

とびっくりしました。わたしは、授業の中で農業ができて幸せだなあと思いました。

そして農業が終わりました。わたしは、農業をして、昔の農家の大変さを知りました。そして、これから五十年後未来の農業は、どんなふうになっているかなとも考えました。

こめられた思い

姥堂小学校 五年 大原 嬉博

水の入った水田。今年も米、田植えの季節。ぼくたち五

年生は今年、米を育てました。ぼくは、米のことをあまり知りませんでした。ふだん食べている米だけど、米について、あまり深く考えたことはありませんでした。毎日食べているのですが・・・。

ここ会津の米はとてもおいしいです。でもなぜ会津の米がおいしいのでしょうか。その秘密を考えてみました。昔の田植えと同じように、ぼくたちは手で植えました。とても大変だなと思いました。家では、米をつくっていません。なので、農家さんの苦労が分かりました。田植えが終わると米はぐんぐん育ち食べるのが楽しみになってきました。たまに友達と見に行くと、前より成長していることが分かりました。これも農家さんの手助けや成長するのを見守っていたからこそその成長だとぼくは、思っています。

秋が近づく九月。いねかりの日です。今は機械でやっているけれど、これもまた手でかりました。米も成長して、まるで自分の子どもみたいでした。実がぎっしり入っていて、とてもしっかりとっていました。みんなで協力してかったので、たくさん収穫できました。

これまでやってきたお米の学習。ぼくたちだけで育てた米ではなく、農家さんやいろいろな人が支えてくれたからこそのお米なので、ぼくはとても感謝しています。育てる

喜び、みんなとの協力、収かくの喜び、そして、農家さんの思いが詰まっているから、お米の一つぶ一つぶが甘く、おいしいのでしょう。

これから、農家さんたちやいろいろな人への感謝を忘れずお米を大切に食べていたいと思います。

笑顔と努力の米作り

駒形小学校 五年 新田 和里華

「ただいまー！」

とお父さんが帰って来るとお父さんは、服をよごして帰ってきます。私は、今日も大変だったなあとも思います。お父さんは、南相馬で仕事したり、会津で米作りをしたりしています。私も一回は、米作りしたいなと思っていたので五年生から米作りということでもワクワクでした。

五月は田植えをしました。田んぼに入るのは、ちょっといやでした。思いきって入り苗の植えかたを、支援員の方に教えていただいてやりました。苗が無くなり、もらおうとして投げてもらったけど、キャッチできず服についてしまいました。でも笑顔でやりました。

次の作業は、六月九日でした。六月は、田の草取りでした。ころばしという物で草を取りました。ころばしは、重く歩くのが大変で、声をかけながら出来ました。六月二十五日は、二回目の草取りをしました。この時は、手で草を取りました。支援員の方に、

「すくうように取るんだよ。」

と教えていただきなるほどと思いました。

十月八日に稲刈りをしました。久しぶりに田んぼに行きました。稲刈りがまで稲を刈りました。私がびっくりしたのは、稲のたばを稲で結ぶということです。初めはできなかったけれど支援員の方に『コツ』や『ねじる』など教えてもらったおかげで上手にできました。私は、稲刈りが一番楽しかったです。お家に帰ってお父さんお母さんにとっても楽しかったことを伝えました。

私は、米作りは、大変だなあと思いました。こんなに手間がかかるんだなあと思いました。先生から今年のお米の量は少ないけどお米の質がいいと言われとてもうれしかったです。私が米作りをして感じたことは、努力しないといのお米はできないということです。そして、支援員の方たちのやさしさと笑顔でできた米なのでおいしい米ができたんだと思いました。

「いただきます」の一言

山都小学校 五年 齋藤 水月花

私は、家でご飯を食べるときに、「いただきます。」をいつも言っています。（言うのはめんどくさいし、絶対言わなくちゃいけないことじゃないから別にいいや。）と思っていますのです。けれども、今回の農業科の体験が心機一転のものととなりました。

一つ目のきっかけは、夏休みにかぼちやの畑の観察に行ったことでした。一学期の総合の学習でかぼちやの世話をしに行った時とは全くちがう景色を見ているような感じがしました。あんなに小さな一センチ五ミリメートル位の種が、学校の黒板三つ分位まで大きく育つなんて目を疑う程でした。思わず、

「うわっ、こんなに大きくなったんだ。」

と言ってしまった程でした。つるもぐんぐん伸びていて、となりのスイカ畑の方にまでからまっていた。命があるからこそ、力強く生長できているんだな、命があるからこそここまで立派に大きくなれたんだな、と思いました。

二つ目のきっかけは、収穫したかぼちやを家へ持って帰って食べたときです。煮物にしたり、スープにしたり、天

ぷらにしたりして食べました。どれも甘みがあって美味しかったです。こんなに美味しいものを食べるなんてもったいないくらいでした。そして、ここまで育ってきた命を自分のために奪ってしまうのはかわいそうだな、と思いました。

私はそのとき、ふと「いただきます。」の言葉が頭にかびました。それから、その言葉の意味を改めてふり返ってみました。私達が食べているものは全て「生命」であって、その生命を「いただく。」から「いただきます。」という意味が込められていることがすごく実感できました。「いただきます。」の一言の中には、素晴らしい意味がつまっています。だから、私はこの言葉を誇りに思い、これからはいただきますをきみにめいじます。命のありがたさを忘れないように――。

米づくり

山都小学校 五年 笠井 文彰

ぼくは小学五年生です。ぼくの通っている学校では、五年生になると、米づくりの学習が始まります。主な内容は、

田植えといねかりです。

五月には田植えがありました。あいにくの雨で、雨の中、みんなで田植えをしました。それでもみんなでたのしくやっていると、

「うわぁ。」

と言って田んぼの中に落ちた人もいました。田植えは決められた場所に、決められた数のイネを植えることは、少しむずかしかったです。

田んぼが黄色く色づいてきたころ、いねかりがありました。とても気持ちいい青空の下で行われました。少し早く田んぼについたので、草のある所に、ねころがってみました。イネの黄色と、空の青色の景色がみえたので、とてもきれいでした。さて、本題のいねかりです。いねかりは、最近めずらしい、手がりをしました。手がりは、親指を上にしてイネをもち、もう片方の手で、かります。手がりは思ったよりものしくて、たくさんかりました。次は、機械でかりました。機械は楽だけど、操作がむずかしかったです。ぼくは、手がりが一番いいなと思いました。なぜなら、手作りはおいしいというからです。その後、かった米をコンバインに通して、だっこくします。コンバインという名前は知っていましたが、どんな機械なのかは知らな

ったので、コンバインでだっこくできるなんてびっくりしました。

ぼくは、日本の主食のごはんが好きです。もっちりしていて、どんなおかずとも合うので、とても気に入っています。ぼくは、米を作るのがこんなにむずかしいなんて思いませんでした。田植えやいねかりだけでなく、水の調節や、土のやわらかさなど、いろんなことをしなければなりません。ぼくは、このような大変な仕事をして作られた米を、たくさん食べたいです。

おいしいお米とそのひみつ

高郷小学校 五年 長水 萌

わたしたち五年生と六年生は、田植えにやってきました。青空の中、緑の稲となる、苗を植えながら、アドバイスを聞いていました。「こうやって足あとのところに植えるのよ。」と農業支援員のかたが教えてくださいました。全部植え終わった後、ながめてみたら、とてもきれいだと感じました。

その次の時、見てみたら、とても大きくなっていました。

観察するとき、なぜ、こんなにじょうぶで、大きく育ったのだろうと思いました。わたしは、考えてからなつくしました。先生がおっしゃっていたことを思い出して。先生は、農業支援員の武藤さんが夏休み中に草むしりをして水の調節をしてくださったとおっしゃっていました。だから、こんなにじょうぶで大きい稲ができたんだと思いました。武藤さんがしてくださったことが大きくてじょうぶな稲になるひみつだと、わたしはその時考えました。このひみつは、それだけではなく、味にも関係しているのです。

稲かりの時、こんなに大きくて、たくさんのお米をつけてくれて、ありがとうと感謝しながらりました。たくさんのお米ができたのは、また、ひみつが関係しているのだと思いました。わたしは心の中でひそかに、武藤さんに感謝していました。

収かく感謝祭の日、とってもおいしいご飯になるといいなど期待をこめて準備しました。

いよいよ食べる時になりました。みんなで

「いただきます！」

と言って食べ始めました。ご飯がとっても、もっちりしていて、

「おいしい！」

と言いながら食べました。この味もあのひみつのおかげだと考え、感謝しました。感謝しながら食べたのが良かったのか、自分たちで作ったからなのか、どうなのか分からなかったけど、今まで食べたご飯の中で一番おいしいと思ったご飯でした。これからも、このひみつを守ってほしいと思います。

自然を理解し、感謝する

第一小学校 六年 菊地 寿来

私は、二度目となる米作りを終えて、様々な自然の働きが、作物に関わっているということを、あらためて強く感じました。

五月に種まきをして、苗を育てましたが、真夏日が続いたことが影きょうして、何センチかのびすぎてしまいました。田植えが終わり、草刈りの予定日が近づいてきました。悪天候が続いたために、なかなか草刈りに行けず、長引いてしまいました。天候が落ち着いてきたころに行ってみると、たくさん草がおいしげっていました。友達と、「うわ、大変そう。」

「時間内に終わるか分からないね。」

というような会話をしました。大変でしたが、友達と分担してやったので、なんとか草刈りは終わりました。翌日に稲刈りをしましたが、悪天候のため、豊作というほどのしゅうかく量ではありませんでした。

ここから、作物のできを左右するのは自然なのだと、あらためて思いました。日照時間が多すぎても、少なすぎてもいけないし、雨が降りすぎても、降らないのもいけないので、作物を作るといのは、難しいことだと思います。

私には、農家の方々のように、将来は農業をするというような選たくはなかなかできません。それでも、農家の方々は自然を受け止め、作物を大切に管理しながら、しゅうかくする日まで、とても大変な作業をしています。今後、私にできることは、作物と、作物を育ててくださった農家の方々に感謝することだと思います。何が起るかが分からない環境の中で育った作物は、たくさんの人々の苦勞の末にしゅうかくされ、私達の食たくに並びます。いつでも、感謝の気持ちを忘れないようにしたいと思います。また、農業自体を左右することもあるかもしれない自然を大切にしなければいけないと思いました。人間も、自然も、作物も、全てつながっているということを意識して、生活して

いきたいです。

農業を通して分かったこと

第二小学校 六年 坂井 佑那

小学校最後の農業では、大根とじゃがいもをつくりました。

じゃがいもは、種いも植えをして、観察をし、収穫をしました。種いもを植えるときに手わたされたのは、じゃがいもに芽が生えたものでした。今までは種やなえだったので、初めて見た種いもにびっくりしました。

大根は、五ミリほどの赤くて小さい種を土の中に入れ、みんなで水やりや草むしりなどをしました。

観察のときは、じゃがいもの葉の表面に白く細い毛がたくさんはえていたりして、葉にいろいろな発見がありました。だから、観察カードにしっかりと記録しました。

今まで、農業を通してさまざまな発見や大変さ、命の大切さを知ることができたと思います。中学年の頃は、草むしりをしたり、水をやりたりするのが大変でめんどくさいとばかり考えていました。でも、何年も農業をしていると、

一つの野菜や米などの農作物に大勢の人の苦労や努力がまつまわっていることが分かりました。店であたりまえのようにたくさん売られているものには、農家の人はもちろん、虫などの生き物の命、できた野菜を店にとどけたりする苦労があるからこそなんだと考えるようになってから、前よりもご飯を食べるとき、食べ物に、裏の见えない大変さを感じ謝して、心をこめて「いただきます」と言うようになり、そのためか、前よりもご飯がおいしく思いました。また、学校で作った野菜を家で食べるとき、家族がおいしいと言つて食べてくれるので、一生懸命作ると、よりおいしく食べてもらえるし、自分でも「一生懸命作つてよかったな」と思えるので、農家の人は、苦労もあるけれどその分おいしく食べてもらえることが本当に喜びなんだなあ、と思いました。

農業を通して学んだこと

松山小学校 六年 若菜 彩華

私は、六年間の農業科を通して、楽しかったこと・苦労したことが数えきれないほどあります。例えば、低学年で

は、ポップコーンやさつまいもを収かく、中学年では、初めての大豆を使った豆腐作り、高学年では、さといも、そしてもう一度ポップコーンを作りました。

そして、低学年の時は、「初めて」ということがいっぱい楽しく出来ました。自分達で収かくした作物を、自分達で料理してすごく思い出に残りました。中学年の時は、一から手作りした豆腐の味が忘れられません。高学年の時は、あまり作物がとれなくて、「今年はみんな不作だなあ。」と先生達が言っていたので、私も、(何が原因なのかなあ。)と思い、自分でも考えてみました。すると、いくつかの考えがうかびました。一つ目は気候です。この時期は雨の日が多く、水をあげすぎの状態になっていたかという事。二つ目は、植えたところの土地が最適ではなかったということ。あくまで、これは私の考えですが、農作物が採れない原因が必ずあると思います。パソコンやいろいろな本で調べてみたのですが共通点がありました。それは、私も考えていた「気候」です。あまり晴れすぎても水が足りなくなり、ずっと雨で水をあげすぎの状態になつていても葉がかれてしまうということです。このことから私はほんの少しでも環境が変わると、作物も上手く育たなかったりすることを農業科で学べました。

このことを通して、私はいろいろなことを学びました。一つ目は農業の楽しさ・大切さ、二つ目はみんなと協力する喜び、三つ目は苦労という言葉を改めて知ったことです。農業科という授業は私たちに多くのことを教えてくれます。だからこそ私は、この六年間農業科の授業が大好きになりました。この経験を生かして、今後も多くのことをやってみたいと思いました。

農業を経験して

松山小学校 六年 瓜生 晃大

ぼく達は日々、当たり前のように、農家の方が育ててくれた作物を食しています。その作物は、勝手に育つわけではありません。農家の方が、一生けん命に、雑草をぬいたり、初めのうちは水をあげたり、作物がよく育つように、いい畑になるように、畑を耕したりするなどして、とても大切に育ててくれています。それは、簡単に短い時間でできるものではなく、長い時間をかけてつくられているものでした。

みなさんはふ段、こういった農業の経験をしていますか。

ぼくは、そういった経験が全くありませんでした。ですから、小学校で学んだ農業科は、初めての経験であり、大変貴重なものでした。その中で、一番印象に残ったのは、三年生の時に育てた大豆でした。三年生の時に大豆で調理したのは、豆だけでしたが、大豆は他の物にもたくさん使われていたので、

「こんなに使われているんだ。」

と、おどろきました。さらに大豆は、簡単に育てられるので、まさに畑の肉だと思います。

今年はポップコーンや里いもを育てていますが、

「ポップコーンは、今年の雨の降る時期が悪かったため、あまり良く育たなかった。」

と、担任の先生が言っていました。そんな年でも、農家の方は一生けん命に、作物を育ててくれています。

この小学校生活の農業科で農業を経験して、ぼくは、改めて農家の方に感謝の気持ちを持ち、作物を大切にして生きていこうと思いました。

地道な努力が実を結ぶ

松山小学校 六年 鈴木 凜乃

「ああ、またこんな暑い日に草むしりか。」

私は、各学年で必ずやる草むしりと水やりがきらいだった。草むしりは、地道な作業でたいくつで虫がたくさんいるからだ。水やりは、水道から畑まで水の満たんに入ったじょうろを持たないといけないからだ。

私達は、一、二年生の時、さつまいもを育てた。下学年であつたため、水やりのじょうろは重く二人がかりで持ったことを思い出した。三年生の時は、豆ふ作りをするので、大豆をみんなで育てた。草むしりに水やり、大変だったけどみんなで作った豆ふは、お店で買って食べるものより、美味しかった。四年生の時は、かぼちやを育てた。朝は毎日、代わる代わる交かんし、草むしりと水やりをやった。かぼちやは、一つ一つが大きく、立派に成長した。五年生の時は、二月の節分に使う、大豆を育てた。全学年の豆を作るため、何もかも全部大変だった。もちろん、草むしりと水やりも。六年生、今育て終わった作物は、ポップコーンだ。六年生は、もう一つある。一年生と一緒に育てた、さつまいもだ。二つともやらないといけないので草むしり

と水やりを、特にがんばらないといけないかった。九月にたったポップコーンは、大きくなっており、私の背を超えていた。私は、草むしりと水やりをがんばって良かったと思つた。きらいでも、食物のためなら、やってもいいかなという気持ちになった。

草むしりと水やりは、食物のためにはとても大切なこと。草むしりをしないと、食物に栄養がとられてしまうし、水やりをしないと、かれてしまう。だから、食物を育てるときは、いやなことでも一生けん命やらなくてはいけないということだ。心をこめて作った野菜は、どんな形であろと、美味しいにちがいない。農業だけでなく、何事も地道な作業や努力が、大きな実を結ぶのだろう。私も地道に一つ一つ努力を重ねて、りっぱな大人になっていきたい。

小学校最後の農業科

関柴小学校 六年 鈴木 莉佳

「今年も、おいしいお米ができるかな。」と私はわくわくしていました。今日は、まちにまった稲刈りの日です。私達六年生は、小学校最後の農業科で「稲作」にチャレンジ

してみました。チャレンジとは言っても去年も「稲作」をしました。私は、「去年とまた同じ」と思いました。去年は、

「稲作は楽しいな。」

と思っただけでした。でも今年の「稲作」では、分かったことや感じたことや改めて思ったことなどがありました。

ふつう、家で農家をやっている人は、だいたい機械のコンバインで刈ると思います。でも私達のかまを使って、人の手で刈るということで体験しました。かまで稲を切っていくことは楽しいことだと感じました。その他にも、稲を束ねて結び、半分に分けてから棒にかける「さでがけ」にもチャレンジしました。稲を棒にかけてかわかすと、味がまろやかになるという意味でやっているそうです。この作業をやりながら気付いたことは、稲の成長のすばらしさです。初めはまめつぶみたいな種もみだった稲がぐんぐん成長して、今は私の弟の身長とほぼ同じぐらいの高さになっています。そして、また新しい種を子孫に残して枯れていく。短い一生だと思いますが、そのくり返しが今、学習している歴史の縄文時代からずっととぎれることなく現在まで続いています。「お米はみんなの協力があるから、私たちは、なくてはならないもの「米」をあたりまえにして

食べていた。でもその協力がなかったら私たちが安心して食べていけない大切な物。」だと気付きました。

さらに自然の豊かさに気付く機会にもなりました。田んぼにきれいに並んだ緑の苗と、生き物がたくさん住んでいる水田。毎日、学校の登下校で見ている風景がとてもすばらしいものに感じられました。

私は、これから人々の力で育った食べ物に感謝の気持ちをおすれずにしていきたいです。

自分の家で学んだこと

熱塩小学校 六年 菅井 日花里

私達の熱塩小学校には、小学校で行う農業学習のまとめとして「ファームステイ」があります。このファームステイは、地域で農業を行っている農家を訪問し、農業の体験をさせていただくものです。私達六年生は、このファームステイに参加しました。私の行き先は自分の家でした。なぜ私の家がファームステイ先になっているかというと、じいちゃんや農作業支援員をしていて、私の家が専業農家だからです。朝、「行ってきます。」と言って出た家に「よろし

くお願いします。」と言って来るのは何だか変な気持ちでした。ファームステイでは、まず畑を一回りしました。自分の家の畑とはいえ、ふだんはあまり行かないので、「広いなあ」と改めて実感しました。毎日の食卓にでてくる野菜が「ここでこんな風に作られているのか。」という発見やおどろきもありました。特にズッキーニという野菜は、形も見た目もキュウリに似ているけど、調べてみるとカボチャの仲間だという事が分かりました。でも、カボチャのようにつるがありません。ばあちゃんの話では、人が受粉をさせてあげないと実が実らないそうです。野菜を収穫するまでには、人の手で手助けする事が大切なんだと思いました。さらに、作物を見守りながら、その時の成長に合わせて何をしてあげようかを考えるのも大切だという事が分かりました。勝手に実がなるのではなく、人間がきちんと世話をしなければ、実はないのです。農業というのは、作物を「作る」というより「育てる」事なんだと思いました。

私にとってファームステイは、農家の仕事を体験するだけでなく、自分の家の仕事を改めて見直す機会になりました。私たちが毎日何気なくとっている食事が、大勢の農家の人の努力によって支えられていることを忘れてはいけな

いと思いました。農業は仕事のはんいが広く大変な仕事です。でも決してなくてはならない仕事だと思いました。

農業の大切さ

熱塩小学校 六年 猪俣 瑞希

「苗、くださーい！」

赤い太陽がキラキラ輝く中、熱塩小学校の田植えが始まった。私達熱塩小では異学年がペアになって田植えを行う。

私は、この田植えが今年で六回目だったので、今回の目標は、一年生と仲よく、ていねいに苗を植えることだった。

一足目を田んぼに踏み入れた時、ぐによつとした感触が一番に伝わってきた。そして、生温かく気持ち悪いぬくもりが足を包んだ。でも、このぬくもりは自然が自分でつくり出すぬくもりだから少し感動した。それから、五本ずつ一列に苗を植えていった。土に苗が植えられた瞬間はとても気持ちよく、自分のこの手で新しい命が誕生したようだった。

汗がしつこく額を流れるようになると、いよいよ反対側の土手が見えてきた。私は汚れた手の甲で汗を拭きラスト

スパートをかけた。何も考えず、苗を植える事だけに無我夢中だった。

「終了！」

先生の声が田んぼに響くと、次々と苗を植え終わったペアが田んぼから上がっていく。私たちのペアは少し遅れながらも苗をすべて植え終わり田んぼを後にした。

今回の田植えを通して、農業の楽しさや嬉しさを改めて感じる事ができた。この経験は将来必ず役に立つと思う。また、農業を実際に経験することによって感じる、苦しさや辛さは、私たちに食べ物大切にするという事を教えてくれた。

この熱塩の地はとても自然が豊かである。食べ物もとてもおいしい。この事を多くの人に知ってもらうために私たちに出来る事は何だろう。そうそれは、日本全国の人にこの熱塩で収穫した野菜を食べてもらうことだ。そのために熱塩の野菜をたくさんアピールしていきたい。そうすればきっと熱塩の地に足を運んでくれるだろう。私はこの熱塩に生まれ、熱塩で育ち、農業の大切さを改めて感じた。

農業に出会えたうれしさ

堂島小学校 六年 廣瀬 茅春

私の小学校では、春の種まきから始まり、秋の稲刈りまで、この自然豊かな堂島で米づくりをしています。そして、私は六年間、農業科の学習をしたことで、農業の大切さと大変さを知ることができました。

四月に五・六年生でまいた稲は順調に育ち、五月に十センチほどのびた苗を収穫祭で地域みなさんとおいしく食べられることを願い、全校生で一本一本ていねいに植えました。それから七月に田の除草を行い、そして九月、稲刈りをすませ、収穫祭では念願の地域みなさんとおいしくいただくことができました。そして、私は数日後に担任の先生が、こう話してくれたことを忘れられません。

「先生は、初めてこの学校に来た時、みんなでお米を育て、そこから収穫祭で地域みんなであいながら食べるという学校は初めて見ました。とても仲の良い学校だし、地域だなと思いました。」

と言ってくれました。私はこの話を聞いて、この地域で生まれてとてもよかったなあと改めて思いました。

しかし、年々農業をやらなくなる人がいることを感じま

した。そこで、気になった私は、祖母に聞いてみることにしました。

「農業の機械化により、人が不必要になってしまったから、減ってしまっただよ。」

と言っていました。私は、せっかく引きつがれてきた農業なのに、残念だなあと思いました。やはり、農業にも、大変なこともたくさんあることを知りました。

このようにふり返ってみると、この堂島でも農業をやる若い人は少なくなっているように感じます。でも一方で、農業を守り続けている人もたくさんいます。おいしい米や野菜がとれる地域に生まれて、私はとても幸せなんだと思います。

私は、農業をやる人がもっと増えればいいなと思います。そのために、安心して農業を続けられる社会にしていきたいです。

全ては“気持ち”

塩川小学校 六年 佐野 茜奈

「あーつかれたー。」

もう何度この台詞を口にしたのか、口にしたのを聞いたのかも分からない。

このとき、私たち六年生は、今年育ててきた大豆を収穫している真っ最中だった。最初の頃はまだ良かったものの、しばらくたつと、同じ体勢で細かい作業をやり続けるとなるとやはり、つらく、集中もとぎれてくる。

この瞬間、私は去年のことを思い出した。

「あーつまらず抜けられない！てかつかれた！」

五年生の農業科で米づくりをしたとき、田植えを手作業でしたときの最初の感想だった。私の家は農家で、私自身も手伝っていたほうだと思う。しかし、作業を見てるとほんとが機械による作業だったため、初めての経験だった。

これは、今年の大豆も同じなのだが慣れないことをするのはつかれる。正直、足が抜けないは、うでが痛いはどう休みたかった。しかし、

“努力は報われる”

苦労したらその分収かくのときの“喜び”は大きい。がんばったならその分大きい喜び、中途半ばにやったらそれなりの喜びがある。これは、農業科だけではない。勉強も運動も、何もかもに通じる“気持ち”

忘れてはいけない“気持ち”

一番大切な「気持ち」

絶対にあきらめない、本気の「気持ち」

私は、農業は楽しいけどつかれる。という考えがあった。しかし、この考えはもう無い。苦労した分、収かくの喜びは大きい。今現在農家の数は、年々減少している。私ができることには限りがあり、自分一人でどうこうなるような問題ではない。だから今、この作文に自分自身の正直な思いを書き、言葉を使つて「伝える」ことはできる。

この考えは曲げない。私は私自信でできることを一生けん命やつていこうと思った。

農業科の体験で一番おどろいた事

駒形小学校 六年 川井 稜太

ぼくが一番心に残ったことは、一本の苗が十本植えた苗とできた稲の数が同じだったということです。

まず、田植えの時に支援員さんが一本の苗と十本の苗ではどちらが多くはえてくるか問題を出しました。ぼくは、十本植えたほうが多く出てくると思いました。けっきょく答えは言わず出きるまで待つ事になりました。

田植えが終わった後ぼくは答えが知りたくてうずうずしていました。

そして、田の草とりのときにぼくはまっさきにその一本の苗と十本の苗を見ました。苗は成長していて一本の苗は三、四本になり、十本の苗は、一本のほうが多くはえてきているのに少しおどろきました。

一ヶ月ほどたつて二回目の草とりがありました。そのときもぼくはまっさきに一本の苗と十本の苗を見ました。すると、この前三、四本になった一本の苗は約十九本くらいになり、この前、十一、二本くらいになった十本の苗は、十八本くらいになっていました。やっぱり一本の苗のほうが多く育っていました。

稲かりの時、少し見ただけでは分からないほど成長していました。稲を刈る前に、一本の苗のほうと十本の苗のほうの稲を先に刈ってみると、一本の苗のほうは三十本、十本の苗のほうも三十本で同じ数でした。なぜ同じ数になったかというと、十本のほうは、きゅうくつで株分かれできるスペースが十分にとれなかったそうです。一本のほうは、株分かれできるスペースが十分にあつたため、よく育ったそうです。

この事でわかったことは、なんでも数や量を多くすれば

いいのではなく、やる物に対して適した数でやることが大切だという事です。効率よく米づくりをするために、学ばなければならぬことがたくさんあるのだと思いました。

作物に「ありがとう」

駒形小学校 六年 尾崎 青音

「元気になっていますか。」

私は、水をあげながら、じゃがいもに話しかけました。今年、学級みんなで相談をして、じゃがいもを育てることになりました。私は、じゃがいもを使って料理を作るのがとても楽しみで、水くれや草むしりをがんばりました。

夏休みの水くれ当番の時は、忘れずに、

「大きくなったね。」

と、じゃがいもに話しかけました。時には、雨で土が、しん食し、土からじゃがいもが出ている時もありました。それを見つけた時は、すっかり土をかけてあげました。小学校では、今年が最後なので、すっかり育つようにしたいという気持ちがあったからです。

楽しみにしていた収穫の時がやって来た時は、ていねい

に掘り出しました。表面が緑色に変わってしまったものがあつたのには残念でしたが、大きいものや小さいものに、土がついていて、とても新鮮でした。たくさん収穫できたので、うれしい気持ちでいっぱいでした。私は、じゃがいもを手に取り、たくさんじゃがいもを運ぶ重さを感じ、何気なくじゃがいもに、

「じゃがいもに苦労が伝わって良かった。育ってくれてありがとう。」

と心の中で言葉をかけました。その言葉は、すっかり育ってくれた作物への感謝から出た言葉です。じゃがいもも喜んでくれたらうれしいです。

今年の農業は、苦労や努力はもちろんありましたが、育てた作物が大きくなっていく喜びや、作物への感謝を一番強く感じました。

これから今後、私が育てる作物にも「ありがとう」という感謝の気持ちを注ぎながら、育てていきたいです。

作物への感謝

高郷小学校 六年 和田 修一

ぼくたちが、いつもふつうに食べている作物。この作物には、人間に必要な栄養がふくまれ、農家の人が何ヶ月もかけ、あせをかき作った一つの宝物なのです。

今、三、四、五、六年生がやっている農業では、学年ごとにほとんど作る作物が違いますので、収かく祭では、おいしい物が食べられます。しかしそれまでの長い月日、ぼくたちのこの手で育てなければいけません。かれてしまうときもあり、動物にとられてしまうときもあるけど、それを取りこえ、がんばってこそ、ぼくたちは食べられることができるのです。

自分は作物を育てる人についての考えがあります。農家の人にはいないと思いますが、めんどくさがる人と、食べられるまでがんばる人がいます。めんどくさがり、放置などすれば作物はかれてしまいます。ぼくは、自分で作った物が食べられるまでが農業だと思います。だから必死に作物を育てられる人はがんばる人だと思います。

ぼくの家でも農業をやっていますが、ぼくは、めんどくさいなどとは思ったことはありません。ときどき、

「ああ暑い。めんどくさい。」

という言葉を使う人がいます。このような人たちにアドバイスがあります。自分が育てる作物は、自分の赤ちゃんだと思えば「めんどくさい」などとは言わないと思います。

植物には命があります。ぼくが大人になったら「食べ物もなにかも命というものがある」と知ってもらうために「作物の大切さ」を呼びかけたり、ポスターを作ったりして何万人の人に知らせたいです。

平成 27 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール審査会

【審査員】

(敬称略)

喜多方市立熱塩小学校長
喜多方市 P T A 連絡協議会長(加納小学校 PTA 会長)
福島県会津農林事務所喜多方農業普及所経営支援課長
福島県会津農林事務所企画部地域農林企画課 主任主査
会津いいで農業協同組合営農部長
喜多方市小学校農業科支援員
喜多方市農業委員会委員
喜多方市産業部農林課長
喜多方市教育委員会学校教育課 課長補佐・指導主事

高橋 吉博
原 道夫
薄 真昭
大竹 一幸
鈴木 幸男
山田 義人
佐原 裕司
佐藤 健志
小杉 一浩

【特別審査員】

関東学院大学教授
喜多方市教育員会教育長

佐藤 幸也
芳賀 忠夫

編集後記

平成 19 年 4 月から 3 つの小学校で始まった「喜多方市小学校農業科」も現在は 17 校すべての小学校で実施しており、今年で 9 年目を迎えました。3 年生から 6 年生までが「総合的な学習の時間」の 70 時間のうち半分の 35 時間にそれぞれの学年が目的を持って取り組んでおります。

私達もできるだけ現場に足を運び、子どもたちの取り組む様子を見たり、一緒に作業をしたり、支援員さんや先生方と話をしたりしましたが、どの現場に行ってもたくさんの『笑顔』があふれていました。子どもたちの『笑顔』、支援員さんの『笑顔』、先生方の『笑顔』。農業科に関わるすべての方が『笑顔』で取り組んでいるのです。正直、農作業は大変でつらいイメージしかなかった私でしたが、農業科の担当になって 2 年、今ではそのイメージは変わり、さらに小学校教育にこの農業科が必要だと強く感じました。

喜多方市小学校農業科作文コンクールは今回で 7 回目を迎え、この作品集には、応募いただいた作品 1,544 点の中から選ばれた 45 作品が掲載されています。入賞された 45 名のみならず、おめでとうございます。審査会の前に作品を読ませていただきましたが、どの作品もすばらしく、審査員の方は審査に苦勞するだろうと思いました。(やはりほとんどの審査員の方が苦勞されたようです。)

最後になりますが、私が読ませていただいた作品の中で、特に印象に残った文章をご紹介しますと思います。

農業は命の大切さがわかり、責任感、やさしさが生まれ、体力がつくというよさがあります。つまり、農業は最高の生き方なのです。だから、ぼくは将来立派な農家になるために、ほこりをもってしっかりと努力していこうと思います。

(学校教育課 主査 穴澤 英明)

平成 27 年度喜多方市小学校農業科作文コンクール作品集

平成 28 年 2 月 発行

喜 多 方 市 教 育 委 員 会

